



「虚心坦懐」

～人文社会科学における「データの科学」～

吉野 諒三

最近、「データの科学」という言葉が各所で使われ始めた。しかし、「データの科学」を分類学会や行動計量学会の研究者が用いる場合は、両学会の元会長であった故・林知己夫先生を中心に2001年頃より出版物（朝倉書店・データの科学シリーズ）で唱えているような意味で用いられることを意図している。すなわち、これは実験や観測の企画から始まり、データ収集からデータ解析の過程の全体を通して現象を理解するという哲学である。戦後の数十年にわたり、数理統計の机上の論理に対して登場した「統計数理」（これは研究所の名前ではない）、「数量化」（これは多変量解析の特定の技法ではない）、「行動計量学」、「多次元データ解析」（多変量解析と数学的には強く関連しているが、哲学的には区別されるべき）、「調査の科学」の延長上に昇華された、社会科学の分野の複雑現象を解析するための新たな統計哲学である。

折しも、今秋、林知己夫記念刊行物が発刊された（勉誠出版）。先生の業績のうち、既に著作となっているものや英文論文などを除くにもかかわらず、15巻にも及ぶ大部である。この中に戦後日本の統計学の柱の一つとなった哲学的発展が理解されるべく、知恵が詰まっている。本人と匿名査読者しか読まないような論文の全集などとは違い、現実の社会の課題解決の必要のために考案された統計手法がどのように開発されたかが、しみじみと了解されてくる。晩年、おそらく最も身近で仕事を続けてきたつもりでいた私ではあるが、先生が狭義の学術論文や著作を少し離れたところでは、通常の学術的討論での慎重な表現とは打って変わり、ここまで自由に強い思想を明言していたのかと思う記事にも邂逅し、今更ながら感慨が深い。国内外の学術討論では、「理論」や「仮説」など表には出さず（欧米流の仮説・検定の手法は現実社会の複雑な現象を解くには幼稚すぎるとして）、データを虚心坦懐に眺め、現象を理解し、問題解決に繋ぐことが肝要と唱えていた。この「虚心坦懐」を誤解し、偏見のない白紙でものごとを判断することなどできないと批判していた方もあった。しかし、これは誤解である。虚心坦懐

<目次>

・巻頭言	
「虚心坦懐」～人文社会科学における「データの科学」～	吉野 諒三 ... 1
・総会記録	2
・運営委員会記録	9
・幹事会記録	10
・研究報告会記録	10
・IFCS（国際分類学会連合）関連	12
・関連学会活動	14
・日本学術会議報告	15
・国際会議開催情報	16
・事務局から	16

とは、雑念を消え去ることではなく、むしろ雑念が浮かんで消え、浮かんで消える、その自他の相互作用の様子を冷静に眺め、やがて心が定まっていくことである。

林先生の1996年の仕事「日本人の心とガン告知」（日本癌病態治療研究会QOL班）を、最近になり手にした。この仕事のすばらしさを考えると、大きなことを数年間も看過してしまったことを、遺憾に思っている。そこでは、癌患者のQOLを考慮した「告知」の問題を扱っている。医療では同じ病気の患者でも、同じ薬を同じ量与えればよいというものではない。各人のパーソナリティをも考慮した、医者と患者の関係系の中で、事を考えていかなばならない。先に記した林の哲学は、近年では我々のグループで文化の連鎖的比較方法論や計量的文明論など、人々の意識の国際比較調査に関連させ展開されていて、それなりに異文化間の相互理解を通した平和の創造という大義があった。しかし、我々が通常扱う調査では、科学的に大標本を抽出する操作には気を配るが、その分、どうしても広く浅い調査になりがちである。それでも林先生を中心とする数十年の調査経験の積み重ねにより、かなり深い考察を可能としてきた。先の医療研究では、一見無関係な調査項目（迷信尺度、超自然観、義理人情など）への回答が、内面的には強く結びついていて、意識の深いレベルを明らかにし、表面的な回答が同じであっても、個人によっては意義が異なり、それを考慮した対処が例示されている。人々の回答を性・年齢・学歴・職業・収入などの外的基準ではなく、パーソナリティという内的基準から観る（診る）という、深い仕事である。

この仕事に触れて、いままで私の頭の中で断片的であった事柄が一つの塊になりつつある。この医療問題と、以前から触れていた原子力安全性の問題(原子力安全システム研究所)、マスコミとの選挙投票行動の研究において、その視点からの仕事が推進されていたのだ。今後の調査研究は、この視点から調査研究のパラダイム(調査票設計から、データ解析まで)を飛躍的に変革していくことに繋がるのではないか。この様な優れた仕事の前では、自然と頭が下がり、意識は心の奥深くへと入り込む。

いま、ここで自らの仕事が社会の何の役に立っているのか、あるいは将来立ちうるのか(純粋数学のように数百年後に実用に供される可能性もあるなどと逃げるのはよそう、それはうそだから)、立ち止まって考えこむようになる。心が叫ぶ。このような優れた統計哲学を「実用主義」ときめつけ、安っぽいアカデミズムを振り回し、結局は、現在も将来も誰に利用されることもない仕事を続けて、狭い範囲の仲間内だけでの世界に閉じこもるのはやめにしよう。(統計数理研究所)

総会記録

平成15年度総会議事録

日時：平成15年12月19日(金) 17:00 - 17:30

場所：統計数理研究所

出席者17名、委任状42名

1. 会長挨拶

2. 議長選出

3. 平成14年度事業報告ならびに決算報告

下記3.1. および3.2. について林幹事長より説明があった。いずれの事項も承認された。

3.1. 平成14年度事業報告

1) 第18回通常総会の開催

平成14年9月11日(水)

多摩大学ルネッサンスセンターにて

出席者9名、委任状46名

2) 第19回研究報告会の開催

平成15年3月28日(金)

多摩大学ルネッサンスセンターにて

特別講演

「Measuring social network on the Web」

Vasja Vehovar (University of Ljubliana)

一般発表8件

出席者：34名

3) 第13回シンポジウムの開催

平成14年9月11日(水)

多摩大学ルネッサンスセンターにて

テーマ「テキスト型データの解析を巡って」

講演4件

出席者：会員13名、非会員125名

4) 会報の発行

JCS会報第25号(平成14年6月)、第26号

(平成15年3月)の発行

IFCS Newsletter No.24の印刷・配布(平成15年3月)

5) 運営委員会の開催

以下の点について、電子メールを活用した打ち合わせを行った。

・総会、研究報告会、シンポジウムの開催

・統計関連学会大会連絡委員会への参加(平成14年6月)

・総会の議題(平成14年9月)

6) 幹事会の開催

以下の点について、電子メール等を活用した打ち合わせを行った。

・平成15・16年度役員選挙

・平成14年度年次計画

(1) 総会の開催

(2) 研究報告会の開催

(3) シンポジウムの開催

・平成13年度会計監査

・統計関連学会連合大会連絡委員会への対応

・会報の発行

7) 統計関連学会連合大会連絡委員会への参加

連合大会実行委員会会議に、会長または幹事長が出席し議論に参加した。

8) Webサーバーの運営

広報担当幹事が担当し、学会活動報告、計画を掲載した。

9) 国際分類学会(IFCS)への協力

分担金を負担した。

3.2. 平成14年度決算報告

会計幹事2名の監査結果を頂いた旨を事務局より説明した(3~4ページの決算書を参照)。また、上田会計監事より補足説明があった。

4. 平成15年度事業計画ならびに予算

下記4.1. および4.2. について林幹事長より説明があった。いずれの事項も承認された。

4.1. 平成15年度事業計画

1) 第19回通常総会の開催

平成15年12月19日(金) 統計数理研究所にて

- 2) 第20回研究報告会の開催
平成16年3月23日(火)統計数理研究所にて
- 3) 第14回シンポジウムの開催
平成15年12月19日(金)統計数理研究所にて
「データの科学と統計教育～情報をよむ手法としての統計学～」
- 4) 会報の発行
JCS会報No.27の発行(平成16年1月を予定)
IFCS Newsletter No.25の印刷・配布(平成15年7月) No.26の印刷・配布
- 5) 運営委員会の開催
電子メールを主にして開催する。
現在までのところ、以下の点について、審議した(平成15年6月、11月、12月)
- ・シンポジウム・学会への協賛
 - ・旅費の支給
 - ・電子メールアドレスの収集
 - ・統計関連学会連絡委員会への対応
 - ・統計関連の学会間の行事の調整や相互の情報提供
 - ・国内外の連絡調整窓口として機能
 - ・連絡委員会のWebの立ち上げによる連絡事項の提示
 - ・2004年の連合大会への協賛
 - ・総会の議題
- 6) 幹事会の開催
電子メールにより、必要に応じて連絡をとり、審議する。
- 7) Webサーバー関係

広報担当幹事が担当して、学会活動の報告、計画を掲載する。

- 8) 国際分類学会(IFCS)への協力
分担金を負担する。
- 9) 他学会との交流
統計関連学会連絡委員会への参加
・連絡委員会、大会実行委員会への参加や連合大会への協賛
要請のあった諸学会・研究会・シンポジウムなどへの協賛

4.2. 平成15年度予算案

5ページの予算書を提示し、了承を得た。

5. 新入会員、退会者報告

平成15年度正会員入会者2名、正会員退会者8名、賛助会員入会社2社。

6. 今後の学会運営について

- 1) 統計関連学会連合大会連絡委員会など、他学会との協力の推進
連絡会議事録の報告を踏まえて、平成15年度の大会をどう協調するかを検討することになった。
- 2) シンポジウムなどの共催
- 3) 学会事務の整理
入会申込書、設立趣意書の更新を検討することとした。
- 4) その他

平成14年度決算書

平成15年3月31日現在

収入の部

科目	細目	予算額(単位円)	決算額(単位円)
前年度繰入金		361,772	361,772
会費収入	会費小計	602,000	570,000
	平成14年度分正会員	(324,000)	(321,000)
	平成14年度分賛助会員	(120,000)	(90,000)
	平成13年度分までの未納入分	(108,000)	(69,000)
	新入会員(賛助)	(30,000)	(90,000)
	入会費	(20,000)	
雑収入	小計	295,000	336,007
	予稿集売り上げ	(30,000)	(18,000)
	研究報告会参加費(含報告書代金)	(60,000)	(48,000)
	シンポジウム参加費(資料代金を含む)	(180,000)	(210,000)
	広告掲載料	(25,000)	(60,000)
	利息・その他		(7)
計		1,258,772	1,267,779

支出の部

科 目	細 目	予算額 (単位円)	決算額 (単位円)
経常運営関係費	小計	430,000	306,075
	会報印刷代 (JCS会報)	(270,000)	(213,675)
	会報印刷代 (IFCS会報)	(100,000)	(92,400)
	連絡用印刷代 (葉書等)	(60,000)	0
大会開催費 (シンポジウム含)	小計	390,000	508,430
	シンポジウム予稿集印刷	(150,000)	(159,600)
	研究報告会予稿集印刷		(167,370)
	会場費		(50,000)
	講師 開催費 (茶菓子等)	(20,000)	(31,460)
事務費	小計	135,000	44,046
	人件費 (交通費含)	(120,000)	(29,280)
	事務用品/振込手数料	(15,000)	(14,976)
通信郵送費	小計	180,000	187,758
	会報送料	(80,000)	(68,028)
	会費請求等郵送料	(60,000)	(119,100)
	切手、その他	(40,000)	(630)
役員改選関連	はがき、印刷		33,068
IFCS運営分担金		30,000	28,530
予備費		229,373	57,750
計		1,004,373	1,165,657

収支差額

収入 (1,237,779) - 支出 (1,165,657) = 差額 (102,122)

差額内訳 102,122円

(銀行口座 78,686円)

(郵便振替口座 500円)

(現金 22,936円)

この差額を次年度繰越金とする。

監査の結果、上記の通り相違ないことを証します。

平成15年7月22日

上田 尚一 (印)

吉野 諒三 (印)

(正式な監査報告書には両委員の押印あり)

平成15年度予算書

収入の部

科 目	細 目	予算額 (単位円)
前年度繰越金		105,400
会費収入	会費小計 平成15年度分正会員 平成15年度分賛助会員 平成14年度までの未納金 新入会員 新入会員入会金	769,000 (352,800) (240,000) (151,200) (15,000) (10,000)
雑収入	小計 予稿集売り上げ 研究報告会参加費 (含報告集代金) シンポジウム参加費 (資料代金を含む) 広告掲載料	145,000 (30,000) (60,000) (30,000) (25,000)
計		1,019,400

(注) 会費収入は次のようにして算出した (平成15年4月1日現在)。

平成14年度分会費

正会員	196人 × 3,000円 × 0.6 =	352,800円
賛助会員	8口 × 30,000円 =	240,000円

未納会費

平成14年度までの未納分 (延べ人数)

正会員	252人 × 3,000円 × 0.2 =	151,200円
-----	-----------------------	----------

新入会員

入会費	5人 × 2,000円 =	10,000円
年会費	5人 × 3,000円 =	15,000円

支出の部

科 目	細 目	予算額 (単位円)
経常運営関係費	小計 会報印刷代 (JCS会報) 会報印刷代 (IFCS会報) 連絡用印刷費 (葉書等)	380,000 (220,000) (100,000) (60,000)
大会開催費 (研究報告会、共催 シンポジウムを含む)	小計 シンポジウム予稿集印刷 研究報告会予稿集印刷 共催シンポジウム発表者謝金 開催費 (茶菓子等)	252,400 (20,000) (150,000) (62,400) (20,000)
事務費	小計 人件費 (交通費含) 事務用品費	155,000 (140,000) (15,000)
通信郵送費	小計 会報送料 会費請求等連絡通信費 切手、その他	170,000 (60,000) (50,000) (60,000)
IFCS運営分担金		30,000
予備費		32,000
計		1,019,400

平成16年度総会議事録

日時：平成16年12月17日（金）17：10 - 17：30

場所：東洋英和女学院大学大学院

出席者10名、委任状24名

1. 会長挨拶

2. 議長選出

吉野諒三氏（統計数理研究所）を議長に選出した。

3. 平成15年度事業報告ならびに決算報告

下記3.1. および3.2. について林幹事長より説明があった。いずれの事項も承認された。

3.1. 平成15年度事業報告

1) 第19回通常総会の開催

平成15年12月19日（金）

統計数理研究所にて

出席者17名、委任状42名

2) 第20回研究報告会の開催

平成16年3月22日（火）

統計数理研究所にて

一般発表7件

出席者：21名

3) 会報の発行

JCS会報第27号（平成16年1月）の発行

IFCS Newsletter No.25の印刷・配布（平成15年

7月）No.26の印刷・配布（平成16年1月）

4) 運営委員会の開催

以下の点について、電子メールを活用した打ち合わせを行った。

・ISMシンポジウム・統計関連学会大会連合大会への協賛（平成15年6月）

・統計関連学会大会連絡委員会への参加、連合大会への協賛（平成15年11月）

・総会の議題（平成15年12月）

・IFCS-2004へのTAPの推薦（平成16年3月）

5) 幹事会の開催

以下の点について、電子メール等を活用した打ち合わせを行った。

・平成15年度年次計画

(1) 総会の開催

(2) 研究報告会の開催

・平成14年度会計監査

・統計関連学会連合大会連絡委員会への対応

・会報の発行

6) 統計関連学会連合大会連絡委員会への参加

連合大会実行委員会会議に、会長または幹事長が出席し議論に参加した。

7) Webサーバーの運営

広報担当幹事が担当し、学会活動報告、計画を掲載した。

8) 国際分類学会（IFCS）への協力

分担金を負担した。

3.2. 平成15年度決算報告

会計幹事2名の監査結果を頂いた旨を事務局より説明した（6～7ページの決算書を参照）。

平成15年度決算書

平成16年3月31日現在

収入の部

科 目	細 目	予算額（単位円）	決算額（単位円）
前年度繰入金		105,400	102,122
会費収入	会費小計	769,000	602,000
	平成15年度分正会員	(352,800)	(288,000)
	平成15年度分賛助会員	(240,000)	(180,000)
	平成14年度分までの未納分	(151,200)	(114,000)
	新入会員	(30,000)	(12,000)
	入会費	(20,000)	(8,000)
雑収入	小計	145,000	111,711
	予稿集売り上げ	(30,000)	(7,000)
	研究報告会参加費（含報告書代金）	(60,000)	(31,500)
	シンポジウム参加費（資料代金を含む）	(30,000)	(43,000)
	広告掲載料	(25,000)	(30,000)
	利息・その他		(211)
計		1,019,400	815,833

支出の部

科 目	細 目	予算額 (単位円)	決算額 (単位円)
経常運営関係費	小計	380,000	194,460
	会報印刷代 (JCS会報)	(220,000)	(83,160)
	会報印刷代 (IFCS会報)	(100,000)	(111,300)
	連絡用印刷代 (葉書等)	(60,000)	(0)
大会開催費 (シンポジウム含)	小計	252,400	289,297
	シンポジウム予稿集印刷	(20,000)	(159,600)
	研究報告会予稿集印刷	(150,000)	(167,370)
	会場費		(5,974)
	講師	(62,400)	(62,400)
	開催費 (茶菓子等)	(20,000)	(5,673)
事務費	小計	155,000	15,552
	人件費 (交通費含)	(140,000)	(8,000)
	事務用品/振込手数料	(15,000)	(7,552)
通信郵送費	小計	170,000	104,900
	会報送料	(60,000)	(97,500)
	会費請求等郵送料	(50,000)	(0)
	切手、その他	(60,000)	(7,490)
IFCS運営分担金		30,000	42,760
予備費		32,000	
計		1,019,400	647,059

収支差額

収入 (815,833) - 支出 (647,059) = 差額 (168,774)

差額内訳

168,774円

(銀行口座 146,762円)

(郵便振替口座 11,500円)

(現金 10,512円)

この差額を次年度繰越金とする。

監査の結果、上記の通り相違ないことを証します。

平成16年7月30日

高倉 節子 (印)

村田 磨理子 (印)

(正式な監査報告書には両委員の押印あり)

平成16年度予算書

収入の部

科 目	細 目	予算額 (単位円)
前年度繰越金		168,774
会費収入	会費小計 平成16年度分正会員 平成16年度分賛助会員 平成15年度までの未納金 新入会員 新入会員 入会金	700,000 (346,500) (180,000) (148,500) (15,000) (10,000)
雑収入	小計 予稿集売り上げ 研究報告会参加費 (含報告集代金) シンポジウム参加費 (資料代金を含む) 広告掲載料	115,000 (30,000) (60,000) (0) (25,000)
計		983,774

(注) 会費収入は次のようにして算出した (平成16年 7月 1日現在)。

平成15年度分会費

正会員	165人 × 3,000円 × 0.7 =	346,500円
賛助会員	6口 × 30,000円 =	180,000円

未納会費

平成15年度までの未納分 (延べ人数)

正会員	165人 × 3,000円 × 0.3 =	148,500円
-----	-----------------------	----------

新入会員

入会費	5人 × 2,000円 =	10,000円
-----	---------------	---------

年会費	5人 × 3,000円 =	15,000円
-----	---------------	---------

支出の部

科 目	細 目	予算額 (単位円)
経常運営関係費	小計 会報印刷代 (JCS会報) 会報印刷代 (IFCS会報) 連絡用印刷費 (葉書等)	360,000 (200,000) (100,000) (60,000)
大会開催費 (研究報告会、共催 シンポジウムを含む)	小計 研究報告会予稿集印刷代等 シンポジウム資料印刷費 開催費 (茶菓子等) シンポジウム発表者謝金	170,000 (150,000) (0) (20,000) (0)
事務費	小計 人件費 (交通費含) 事務用品費	155,000 (140,000) (15,000)
通信郵送費	小計 会報送料 会費請求等連絡通信費 切手、その他	170,000 (60,000) (50,000) (60,000)
IFCS運営分担金		30,000
予備費		98,774
計		1,019,400

4. 平成15年度事業計画ならびに予算

下記4.1. および4.2. について林幹事長より説明があった。いずれの事項も承認された。

4.1. 平成16年度事業計画

- 1) 第20回通常総会の開催
平成16年12月17日(金)
東洋英和女学院大学大学院にて
- 2) 第21回研究報告会の開催
平成16年12月17日(金)
東洋英和女学院大学大学院にて
- 3) 会報の発行
JCS会報No.28の発行(平成17年1月を予定)
- 4) 運営委員会の開催
電子メールを主にして開催する。
現在までのところ、以下の点について、審議した。
 - ・統計関連学会連合への加入(平成16年9月)
 - ・分類学会日独シンポジウムの共催(平成16年9月)
 - ・総会の議題(平成16年12月)
- 5) 幹事会の開催
電子メールにより、必要に応じて連絡をとり、審議する。
- 6) Webサーバー関係
広報担当幹事が担当して、学会活動の報告、計画を掲載する。
- 7) 国際分類学会(IFCS)への協力
分担金を負担する。
- 8) 他学会との交流
統計関連学会連絡委員会への参加
 - ・連絡委員会、大会実行委員会への参加や連合大会への協賛要請のあった諸学会・研究会・シンポジウムなどへの協賛

4.2. 平成16年度予算案

8ページの予算書を提示し、了承を得た。

5. 新入会員、退会者報告

平成15年度正会員入会者2名、正会員退会者3名。
[参考:現在の会員数] 正会員165名、賛助会員6社(平成16年12月現在)

6. 今後の学会運営について

- 1) 統計関連学会連合など、他学会との協力の推進
連絡会議事録の報告を踏まえて、平成15年度の大会をどう協調するかを検討することにな

った。

- 2) 分類学会日独シンポジウムの共催
- 3) 他の学会等が開催するシンポジウムなどの共催

7. その他

- 1) IFCSについて
- 2) その他

運営委員会記録

平成15・16年度第3回運営委員会

日時:平成15年12月17日

場所:電子メールによる

出席者(回答者):今泉 忠、上田 尚一、大津 起夫、大橋 靖雄、後藤 昌司、佐藤 美佳、佐藤 義治、清水 信夫、白旗 慎吾、鈴木 督久、丹後 俊郎、林 篤裕、松田 芳郎、水田 正弘、宮原 英夫、村上 征勝、村田 磨理子、矢島 敬二、山岡 和枝、吉野 諒三、吉村 宰

下記の議題について審議し過半数の了承が得られた。

議題:

日本分類学会平成15年度総会(第19回)議題案について(項目の詳細は「総会記録」の項を参照)

平成15・16年第4回運営委員会

日時:平成16年3月15日

場所:電子メールによる

出席者(回答者):今泉 忠、上田 尚一、大津 起夫、大橋 靖雄、後藤 昌司、佐藤 美佳、佐藤 義治、清水 信夫、白旗 慎吾、鈴木 督久、丹後 俊郎、林 篤裕、松田 芳郎、水田 正弘、宮原 英夫、村上 征勝、村田 磨理子、矢島 敬二、山岡 和枝、吉野 諒三、吉村 宰

下記の議題について審議し過半数の承認が得られた。

議題

IFCS-2004におけるTravel Award Program(TAP)への日本分類学会からの推薦者を

- ・沼崎穂高(大阪大学大学院医学系研究科)
- ・島村徹平(北海道大学大学院情報科学研究科)

の2名とする案について

平成15・16年第5回運営委員会

日時：平成16年6月16日

場所：電子メールによる

出席者（回答者）：今泉 忠、上田 尚一、大津 起夫、大橋 靖雄、後藤 昌司、佐藤 美佳、佐藤 義治、清水 信夫、白旗 慎吾、鈴木 督久、丹後 俊郎、林 篤裕、松田 芳郎、水田 正弘、宮原 英夫、村上 征勝、村田 磨理子、矢島 敬二、山岡 和枝、吉野 諒三、吉村 宰

下記の内容について報告した。

報告事項

IFCS-2004におけるTAPに日本分類学会から推薦した

- ・沼崎穂高（大阪大学大学院医学系研究科）
- ・島村徹平（北海道大学大学院情報科学研究科）の両氏の推薦決定について

平成15・16年第6回運営委員会

日時：平成16年9月15日

場所：電子メールによる

出席者（回答者）：今泉 忠、上田 尚一、大津 起夫、大橋 靖雄、後藤 昌司、佐藤 美佳、佐藤 義治、清水 信夫、白旗 慎吾、鈴木 督久、丹後 俊郎、林 篤裕、松田 芳郎、水田 正弘、宮原 英夫、村上 征勝、村田 磨理子、矢島 敬二、山岡 和枝、吉野 諒三、吉村 宰

下記の議題について審議し、いずれも過半数の了承が得られた。ただ、学会連合への加入について否とする意見には学会連合との関係、連合の目的の明確化、人文科学関連学会との関係などについて再検討の要望があり、また過去の連合大会への要望事項もあった。

議題

1. 統計関連学会連合への加入について
2. 分類学会日独シンポジウムの共催について
3. 日本分類学会研究報告会および総会開催について

幹事会記録

平成15・16年度幹事会報告

各運営委員会、総会前の会議および随時電子メール、電話等により打ち合わせを行った。

1. 平成15・16年度運営委員会開催
2. 平成16年度年次計画

(a) 総会開催

(b) 研究報告会開催

3. 平成15年度会計監査
4. 統計関連学会連合大会連絡委員会の設置に伴う分類学会の参加について
5. 会報発行

国際学術情報流通基盤整備事業についての検討

平成16年7月7日に学術総合センターで開催された「国際学術情報流通基盤整備事業（SPARC/JAPAN）説明会」に、日本分類学会からは清水広報担当幹事が参加した。資料として参画提案書及び種々の説明パンフレットなどが配布された。

SPARC/JAPANへの参加は現状では困難と考えられるが、日本の学術情報の国際化・電子化を進めるこれらの事業については今後とも関心を払い、動向を随時把握する必要があると思われる。

研究報告会記録

第20回研究報告会

日時：2004年3月22日（火）13：30～17：00

会場：統計数理研究所

参加者：21名

7件の一般発表があり、活発かつ有意義な討論が行われた。

カイ離率と 離率 離率による株の売買行動分析

近藤 明良（拓殖大学）、上田 勝雄（株）アイ・アンド・シー）

離率 離率を定義し提案した。そしてそれらが如何に投機の売買に役立つかまた好結果もたらし低金利時代に低リスク高配当が得られるかを述べたものです。

広域メッシュ統計値からの小売集積地の抽出と影響圏の導出

田村 仁（東京理科大学）

本論文では、メッシュと呼ぶ格子状の区域別に商業統計値を整理した広域メッシュ統計値データから、行政区分に影響されない小売集積地を、画像処理技法を応用して抽出する。また、消費者行動の仮定から小売集積地間の接続性を推定し、影響圏の導出を図る。小売集積地の影響圏とは、その小売集積地と競合関係にある別の小売集積地の範囲、集合をいう。実際に平成7年度の埼玉県のメッシュ統計値データ

から得られた影響圏を、実際に行われた消費動向調査の結果と比較したところ、十分妥当な結果を得られたことが確かめられた。

関連記事の自動探索と可視化

石塚 隆男（亜細亜大学）、高嶋 啓介（東京都立科学技術大学）、山本 久志（東京都立科学技術大学）

本研究では、新聞記事データベースからある事件や事故を報じた一連の新聞記事を自動的に探索し、その結果を可視化することを目的とする。具体的には、記事間の類似度として荷重idfを用いた類似度を定義し、パス図を応用した記事マップにより可視化を試みた。荷重idfは、共通する単語により連鎖する記事を抽出するのに有効と考えられるが、記事間の関係構造と荷重関数の与え方についてさらに検討する必要がある。また、本手法は相関係数行列から出発する共分散構造分析にも類似しており、理論的な検討を行っていきたい。

脳卒中後片麻痺患者の歩行移動動作テストの簡略化の検討

清水 和彦（北里大学）、田尻 寿子（北里大学）、田辺 勇人（茅ヶ崎リハビリテーション専門学校）、白鷹 増男（北里大学）、宮原 英夫（茅ヶ崎リハビリテーション専門学校）

In our previous study using 179 post-stroke patients with hemiplegia, we employed the standard test consisting of 93 items for assessing gait or related ambulatory actions to investigate the relationship between the comprehensive evaluation by the rater and the sum of all 93 test scores, between the grade of functional disturbance of the patients and the number of tests which could be performed successfully by the same patients, and the mutual correlation among all tests expressed by the scores. In present study, we first confirmed by means of principal component analysis whether each test item used in previous study was effective for evaluation of the severity of ambulatory disability, but not of other functions such as body balance. Then, we narrowed down the number of selected test items by referring to the results of Cronbach ' s alpha and their respective clinical features. Finally, we worked out an abbreviated test battery composed of 7 items. The alpha value of the combination of this refined test battery of 7 items stood at 0.958. The sum of the 7 item test scores for each individual was statistically compared with the subjective scores given by the raters in their comprehensive evaluation. The resulting correlation coefficient was 0.982. These results pro-

vide evidence that our new shorter test battery would maintain its higher performance both in validity and reliability, even when the number of test items is reduced from 32 to 7.

『データの科学』所感

矢島 敬二（東京理科大学）

林知己夫『データの科学』（朝倉書店、2001）読後の所感として次のようなことがある。まず、科学の対象としてのデータの範囲規定が明確でないように思われること。もしデータ一般を扱うのであれば物理学などを含むデータ一般の取り扱いについても論じなければならなくなるのではないかと思われるが第2章の「データをとること」では行動計量科学の分野のデータのみを扱っていること。それらの点をふまえると書名は『行動計量科学研究におけるデータの科学』などと少し限定した方がよいのかという感ずるが、方法論は広範囲の適応性をもつことも主張すべき事実であろう。

大規模二値データのクラスタリング

佐藤 義治（北海道大学）

本報告における大規模なデータとは属性の数および観測数ともに多数あることを想定しているが、特に属性数が多くなると、従来の二値データの類似度の概念では不十分なものがあり、また、通常の数値データに対応する平均や分散の概念を自然な方法で定義することは困難である。そこで、本研究では二値データを方向データ（directional data）に変換し、それに基づく、記述的な諸量（平均や分散）を用いて、従来のk-平均法に相当するクラスタリング法を提案したものである。属性数が約1500あるデータ（ウェブ含まれる画像を含む情報が広告か否かを区別する）に対する実験では有効に機能することが示された。

国際比較調査からみた健康感と国民性

- 質問項目と国・地域のパターン分類 -

山岡 和枝（国立保健医療科学院）、吉野 諒三（統計数理研究所）

健康感と国民性に着目し、国際比較調査における質問と国・地域の関連性について、質問文の相違、地域、調査時点での類似性を検討した。調査対象は一般成人住民で、調査方法は統計的に無作為抽出した調査対象への個別面接聴取法である。回答傾向の相違という観点から時点、質問文、回収後サンプルのウェイトの有無について頻度および構造について検討し

たところ、構造の類似性に関しては、回収後サンプルの性・年齢層ウェイトの有無、および同時期の2つの調査間での影響は大きくないことが示唆された。

IFCS (国際分類学会連合) 関連

IFCS-2004大会報告

IFCS-2004 Chicago大会 参加報告

馬場康維

IFCS-2004が、7月15日～18日の4日間、シカゴのIIT (Illinois Institute of Technology in Chicago) で開催された。ショートコースが開催された14日も入ると、5日にわたる会議になる。大会事務局の中日の発表では、200人を超える参加者があったとのことであった。15日の開会式のあとのPlenaryセッションをかわきりに、4日間で特別講演、招待講演、一般講演、あわせて165の講演が行われた。Plenaryセッションは、毎日、最初の時間帯に設けられており、並行セッションをなくして全員が聞くことができるように設定された1時間トークで、大会の特色を示すものになっている。プログラムによれば下記の講演が行われた。

15日:

J.Ramsey (McGill Univ.) “Modeling the Evolution of Disease Symptoms with Principal Differential Analysis”

16日:

G.Celeux (INRIA) “Choosing a Model for Purposes of Classification”

17日:

M.Steel (Univ. of Canterbury) “Phylogenetic Closure Operations and Homoplasy-Free Evolution”

18日:

D.Hand (Imperial College) “Academic Obsessions and Classification Realities: Ignoring Practicalities in Supervised Classification”

この中の、初日のRamsey教授の講演を聞いたかったのであるが、会場についた時間の関係で聞きそこなったのが残念である。

一般の発表はさすがに、クラスタリングに関するものが多いが、ファイナンスから遺伝まで、トピックスは多岐にわたっていた。招待講演は、3つのトピックスが並行セッションで行われ、一般セッション、特別セッションは5つのセッションが同時に行われており、聞きたいものが重なり会場をうろうろする時間が多かった。フランスのDidayを中心とする人々は、相変わらず、symbolic data analysisの研究を続けており、研究の息の長さが感じられる。

私が、この大会に参加したのは、一昨年夏にご逝去された林知己夫先生を偲ぶMemorial Session for Chikio Hayashiでの講演のためである。このセッションは大隅昇統計数理研究所名誉教授がオーガナイザーとなり設けられたもので、IFCSの創設に尽力された林知己夫先生を偲び下記の4講演が行われた。座長は、林先生旧知のローマ大学のRizzi教授である。発表用のほかにもう一台のプロジェクターを用い、林先生のプロフィールの映像を流しながらの講演が行われた、

1. Noboru Ohsumi (The Institute of Statistical Mathematics), Memories of Chikio Hayashi and his Great Achievement
2. Ludovic Lebart (ENST), Validation Technique in Correspondence Analysis
3. Hans-Hermann Bock (Aachen University of Technology), Classification in the Life Span of Chikio Hayashi
4. Yasumasa Baba and Noboru Ohsumi (The Institute of Statistical Mathematics), Chikio Hayashi and Data Science in Japan

大隅先生はこれまでの林先生の業績とその人となりを紹介した。Lebart教授は数量化理論とコレスポネンスアナリシスのかわり方を述べ、コレスポネンスアナリシスにおけるexternal validationとinternal validationとについて紹介した。Bock教授は、林先生が活躍した過去40年間を振り返り、それぞれの時代に発展してきたクラスター分析法について概観した。私は、コレスポネンスアナリシスより20年近く前に数量化が誕生していることを踏まえて、1950年代の数量化理論誕生の話を中心に、戦後の標本調査の研究が日本人の国民性の調査、国民性の国際比較研究CLA (Cultural Link Analysis) と発展してきた様子を紹介し、先生は統計学者という狭い範囲の学者ではなくあらゆることを研究の対象とする科学者であったという話で締めくくった。このセッションには林先生を知る多くの方にお集まりいただき、そういう中で報告ができ、光栄であった。

IFCSにはTAP (Travel Award Program) という大会に参加する若手研究者への旅費の補助制度がある。この創設に尽力された林先生に敬意を表して、今回からChikio Hayashi Travel Awardという呼称になったとのことである。今回はこのawardが9名の若手に与えられた。日本から出席の若手では、沼崎穂高、島村徹平の両氏がこれを受けた。

Springerから出版された大会プロシーディングス、D.Banks他、“Classification, Clustering, and Data Mining Applications”の扉には、下記のように記されている。



Memorial Session for Chikio Hayashiにて



会場前景

写真提供：沼崎穂高（大阪大学）

This book is dedicated to the memory of
Professor Chikio Hayashi

Who served as president of the International Federation of Classification Societies from 1998 until 2000. His leadership, his scholarship, and his humanity are an example to us all

林先生が大きな存在で、敬愛される存在であったことをあらためて感じた次第である。

大会の運営はアメリカ流の（？）さらりとしたものであった。大会初日のウェルカムパーティーは、ミシガン湖のクルージングでシカゴの夜景を楽しんだ。バンケットは大学内のレストランでビュッフェスタイルである。大学からホテルのあるダウンタウンに行くには、地下鉄かバスを使うことになる。帰りが遅くなると、一人で帰るのが怖いということで、帰り道クラスターができたようである。実際、日中、1人でバスにのりダウンタウンまで帰ったことがあるが、1人ではあまり落ち着いた気分で乗れる雰囲気ではなかった。

最後の締めくくりClosing Sectionはセントアンド

リュース大学のDavid Wishart教授の、"Classification of Single Malt Whiskies by Flavour"で、講演者も聴取もウイスキーグラスを持ちながらのセッションであった。エジンバラで開催されたIFCSに参加した人は覚えていると思うが、その折のバンケットでスコットランドの衣装をまとって舞台上で挨拶をしたあのWishart教授である。こんどは、ずらりと並んだウイスキーボトルをバックに講演をした。その後のテイastingがそのままフェアウェルパーティーの様で、ウイスキー好き（あるいは単なる酒好き）の参加者は並んだ銘酒を楽しんだ。私を含む日本人参加者の仲間は、帰り道の危険を感じないですむように、途中で切り上げることにしていたのであるが、銘酒の誘惑には勝てず、最後まで残った人もいた。帰り道の危険という尺度だけで、一つのクラスターになって帰るはずであったが、アルコールへの執着という第2の変数で、クラスターが二つに分かれることは予想していなかった。

Lebart、Bock、Murtaghなど統数研にもこられたことのある先生たちと話ができて旧交を温めることができた。国際会議に出席するといつも感じることであるが、国内では多忙でゆっくり話もできない日本人たちとも色々意見交換ができて、大変有意義な時間を持つことができた。なお、次回IFCSは、2006年にスロベニアで開催される。会員諸氏の多くの参加が望まれる。

IFCS-2004 Chicago大会 TAP受賞報告

沼崎穂高（大阪大学大学院医学系研究科）

今年7月中旬に米国のシカゴで行われたIFCS-2004に参加した際に、私はTAP（Travel Award Program）による旅費給付補助を頂くことができました。まずは、関係者の方々に御礼申し上げます。

TAPは、若手研究者のIFCS大会への参加を促進する目的で1998年のローマ大会から設けられた制度です。今回の受賞者は私を含めて9名でした。

TAP授賞式はIFCS初日のOpening Sessionの中で行われました。今回は、各所属学会および受賞者が読み上げられ、受賞者がその場で起立し、大会参加者から拍手による賞賛を頂きました。そしてOpening Sessionの後、各々に割り当てられた旅費同封の封筒を受け取り、受領承諾書へサインするだけの簡単なものでした。私自身、これまでは医学系の分野の学会に参加することが多く、今回のIFCSを含めこのような分野の学会は初参加ということもあり、他の参加者の発表に対する期待感とともに、自分の発表に対する不安感がありましたが、学会中に多くの先生方とお知り合いになることができました。

大会ではデータ解析の理論や分類手法の様々な分野における応用にいたるまで幅広くの発表がなされ

ており、中でも、Statistical Methods in Immunology and MedicineのSessionでの発表が強く印象に残りました。

大会最終日には、IFCSの創設に高く寄与され、TAPの創設にも尽力された林知己夫先生（今大会に限ったことかも知れませんが、TAPの名称が「Chikio Hayashi Travel Award」となっていました。）のMemorial Sessionが開催され、林先生の長い年月の中での広範囲にわたる精力的なご研究、学会・学界活動を、ほんの一部ですが知ることができ、深く感銘を受けました。

また、大会開催が7月ということもあり日没が21時頃と遅かったため、その日の日程が終了した後、少しの時間を利用してシカゴのダウンタウンの散策などをして楽しませていただきました。私自身、シカゴを訪れるのは3回目だったのですが過去2回とも冬であったため、今回はまたシカゴの新しい面が見ることができ、良い思い出として残っております。

最後に、本大会は本当に幅広い分野の研究者が参加されていて、その発表・講演の内容も多岐に渡っており、とても有意義な大会であったと感じておりますので、TAPの応募資格のある方はぜひ応募・参加されることをお勧めします。

IFCS-2004 Chicago大会 TAP受賞報告

島村徹平（北海道大学大学院情報科学研究科）

去る平成16年7月15～18日、米国イリノイ州シカゴにて開催されたIFCS-2004に、私はTAP（Travel Award Program for young researchers）による旅費給与補助を頂いて参加することができました。今回の受賞は、関係者の皆様のご尽力の賜物であり、この場をお借りして心より御礼申し上げます。

TAPは若手研究者の参加支援を目的として、1998年のローマ大会から設けられた制度で今回で3回目となります。過去2回の大会では、それぞれ1名の若手の日本分類学会員がTAPによる給与を受けましたが、日本分類学会幹事会と運営委員会の方々のご協力とご尽力のお陰で、今回は大阪大学大学院医学系研究科の沼崎穂高さんと私の2名が補助を頂けることとなりました。

今回のTAP授賞式は大会初日のOpening Sessionの中で行われ、各所属学会および受賞者が読み上げられ、その場で受賞者が起立をし、拍手によって迎えられました。そして、Opening Session後に、受賞者に対して旅費同封の封筒が渡され、その場で受領承諾のサインをするという形で終わる予定でしたが、私を含む数人の受賞者がSessionが終わると同時にコーヒーを飲みに行ってしまったため、担当の方を困らせてしまった様でした。今回の受賞者は私を含

めて9名でした。

今回の研究発表では、特別講演と一般講演合わせて160件を超える発表が行われました。発表の内容に関してですが、判別や分類などのデータ解析に関する理論やその応用に関する研究から、webデータや関数データなどの新しいデータに対する方法論に関する研究まで幅広い研究テーマの発表がありました。また、TAPの創設に尽力され、TAP運営委員会運営委員長も務められた林知己夫先生のMemorial Sessionも開催されました。私にとっては、どの研究発表も非常に新しく興味深いものでしたが、中でも関数データ解析の第一人者で在られるRamsay先生の特別講演と林先生のMemorial Sessionが強く印象に残りました。

私自身、単身での渡米は初めてでしたので、参加が決まった際には少々不安でした。しかし、大会では多くの先生方にお世話になり、その不安もどこかへと吹き飛び、非常に有意義な大会参加となりました。また、ReceptionのDinner Cruiseでは、Michigan湖から高層ビルが立ち並ぶ美しいChicagoの夜景を眺めながら至福の一時を過ごすこともできました。最後に、ご指導賜りました先端データ科学研究室の水田正弘先生、南弘征先生を初め、ご協力して頂いた諸先生方、同研究室の方々に深く感謝致します。

IFCS Newsletter冊子の郵送廃止について

日本分類学会ではこれまでIFCSから所属各学会へ配信されてきたIFCS Newsletterの電子ファイルを印刷し冊子として会員の皆様に郵送して参りました。しかし、この度IFCSでは電子ファイルを公式ホームページ上で直接公開するようになりました。このため、日本分類学会としても事務作業ならびに経費節減のため冊子の郵送を廃止し、会員の皆様には公式ホームページからのダウンロードをお願いすることに致しました。

IFCS Newsletterのダウンロードはバックナンバーを含め<http://www.classification-society.org/newsletter.html>より可能です（郵送済みの最新号はNo.26、この号の発行時期頃にはNo.28までダウンロードが可能になる予定です）。なお、今後都合により郵送を希望される方は、事務局までご連絡ください。

関連学会活動

【統計関連学会連絡委員会】

統計関連学会連合についてはこれまでお知らせしている通り、日本分類学会も何らかの協力を行う方針です。連絡委員会（平成15年3月29日、6月7日、

9月5日、10月18日に開催)には、矢島会長と林幹事長の少なくともどちらか一方が参加しております。審議の内容については、今後連絡委員会で立ち上げ予定のWebページに掲載されるものと思われるので、そちらを参照して下さい。

[その他]

各学会の活動状況は、ホームページをご覧ください。

日本統計学会

<http://www.jss.gr.jp/>

応用統計学会

<http://www.applstat.gr.jp/>

日本計算機統計学会

<http://www.jscs.or.jp/>

日本行動計量学会

<http://www.soc.nii.ac.jp/bsj/>

日本計量生物学会

<http://www.soc.nii.ac.jp/jbs/>

日本学術会議報告

統計学研究連絡委員会(統計研連)第19代委員長柳川堯先生(日本学術会議第4部会員)から昨年12月にお寄せいただいた報告をそのまま掲載いたします。文中の所属や肩書きなどは当時のものです。

2003年12月25日付記事

10月末に日本学術会議第141回総会が開催され、第19期の活動方針・計画が採択されました。第19期においては、「社会のための学術」を基軸にしつつ、以下のような具体的な課題ごとに8つの特別委員会を設置し、その活動を中心に短期的、長期的課題に機能的に対処していくことになりました。設置された課題は以下のようです。「子どもの心」、「安全・安心な世界と社会の構築」、「循環型社会と環境問題」、「若者の理科離れ問題」、「大都市をめぐる課題」、「人口・食料・エネルギー」、「生命科学と生命倫理」、「水産業・漁村の多面的機能に関する問題」。課題の羅列だけでは、その内容を把握するのは難しいと思います。興味ある方は日本学術会議のホームページ(<http://www.scj.go.jp/>)をご覧ください。

以下、私どもに密接な統計学研究連絡委員会(以下、統研連と略記)の報告です。

1. 統研連の委員について

前回の報告でも述べましたが、統研連は、日本統

計学会、行動計量学会、応用統計学会、日本計量生物学会、日本計算機統計学会、日本数学会統計数学分科会の6学会から選出された委員、および日本学術会議の7つの部の各部から推薦された日本学術会議会員から構成されています。他の研連とは異なっており、日本学術会議の各部から会員1名が加わっているのが特徴です。次の方々が委員に決まりました。なお、委員長に柳川、幹事は岸野、竹村両委員が選定されました。

袖井孝子(第1部:お茶の水女子大学教授;統計審議会委員)

山本吉宣(第2部:東大・院・総合文化研究科教授)

松田芳郎(第3部:東京国際経済大・院・経済学研究科長)

柳川 堯(第4部)

久米 均(第5部:中央大・理工・経営システム工学科教授)

塩見正衛(第6部)

佐藤 洋(第7部:東北大・院・医学系研究科教授)

岸野洋久(日本計量生物学会:東大・院・農学生命科学研究科教授)

佐藤義治(応用統計学会:北大・院・工学研究科教授)

白旗慎吾(日本数学会統計数学分科会:阪大・院・基礎工学研究科教授)

竹村彰道(日本統計学会:東大・院・数理情報工学系研究科教授)

馬場康維(日本計算機統計学会:統計数理研究所教授)

2. 第1回統計学研究連絡委員会

・科研費補助金に関する動向

次年度から総合科学技術会議の方針で、学術会議の推薦のみでは決めないことになる予定です。すなわち、学術振興会では、各方面の情報をもとに、プログラム・オフィサーとよばれる専門員をえらび、プログラム・オフィサーが審査委員を選定する体勢となります。このため、学術会議から推薦した候補者が必ずしも審査委員とならないこともあるそうです。

・キーワードの見直しについて

上のことに関して、今後はキーワードと審査員の対応が重視されるようです。キーワードを若干整理しかついくつかのキーワード追加の提案を行いました。

3. 研連の活動方針

・統計学関連の「課題別委員会」構築をおこなう。

・第18期に引き続き統計学関連学会の強調を推進する。とくに、各学会にお願いして、統計科学の研究を志す学生の勧誘を目的とする各学会のPRや統計の紹介の文章を集め、それらをもとにホームページを立ち上げることにしたい。また、ホームページに高校における統計教育等に役立つ総合科目の例などを掲載することも検討したい。各学会からの絶大な協力を期待します。

国際会議開催情報

ISIのWebサイトに最新の国際会議情報が掲載されています。詳しくは、
<http://www.cbs.nl/isi/calendar.htm>
を参照ください。

事務局から

事務局問い合わせ先の変更について

本学会の事務担当が林なおみから清水信夫に変更になりました。これに伴い、連絡先電話番号および電子メール送付先が変更になっています。詳しくは末尾を御覧下さい。

日本分類学会ホームページ

ホームページのURLは、<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jcs/>です。研究会の予定などの掲載情報を広く募集しております。詳しくは事務局までご連絡ください。

報告集の頒布

シンポジウム、研究報告会の報告集は若干の在庫がありますので、ご入用の方は事務局までお問い合わせください。

会報へ寄稿のお願い

今号に寄稿いただいた皆様には、紙面を借りて、お礼申し上げます。お忙しいところ、ありがとうございました。発行が遅れたことをお詫び申し上げます。

JCS会報では、常時、会員の皆様の寄稿をお願いしております。国内外の学会に参加した際の印象記や研究会の予定など、会員に知らせたいことなど広く募集しております。詳しくは事務局までご連絡ください。電子メールでの寄稿を歓迎します。

会費納入のお願い

会費収入が見込みを下回る年度が続いております。納入へのご協力をお願いいたします。ご不明の点は、事務局までお問い合わせください。

IFCS論文集について

IFCS-93、IFCS-96、IFCS-98、IFCS-2000、IFCS-2002大会の論文集が発刊されておりますので、ご関心のある方は出版社までお問い合わせください。

New Approaches in Classification and Data Analysis
(1994)
(Proceedings for the IFCS-93, Paris, 1992.)

Data Science, Classification and Related Methods
(1998)
(Proceedings for the IFCS-96, Kobe, 1996.)

Advances in Data Science and Classification (1998)
(Proceedings for the IFCS-98, Rome, 1998.)

Data Analysis, Classification and Related Methods
(2000)
(Proceedings for the IFCS-2000, Namur, 2000.)

Classification, Clustering, and Data Analysis: Recent
Advances and Applications (2002)
(Proceedings for the IFCS-2002, Cracow, 2002.)

なお、いずれの巻もSpringer-Verlagから出版されております。現時点での価格等につきましては、下記宛にお問い合わせください。

〒113-0033 東京都文京区本郷3-3-13
Springer-Verlag Tokyo (シュプリンガー・フェアラーク東京) 編集企画部まで
E-mail : kambara@svt-ebs.co.jp

<学会問い合わせ先>

日本分類学会事務局

〒106-8569 東京都港区南麻布4-6-7

統計数理研究所気付

学会事務担当：清水信夫

TEL : 03-5421-8768

FAX : 03-5421-8796 (日本分類学会宛を明記のこと)

E-mail : hayashi@rd.dnc.ac.jp (林篤裕、幹事長)

nobuo@ism.ac.jp (清水信夫、広報担当幹事)

URL : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jcs/>